

合宿型ボランティア活動による青年の自立

九州大学大学院芸術工学研究院環境計画部門 朝 廣 和 夫

1 はじめに

2007 年 2 月 25 日、アル・ゴア（Al Gore）元米副大統領は、地球温暖化への取り組みを描いた映画「不都合な真実（An Inconvenient Truth）」で第 79 回アカデミー賞の長編ドキュメンタリー賞を受賞しました。現代社会は急速に環境問題への対応へと意識付けされつつあります。

今後の環境問題への取り組みは、これからの社会を担う青年達に大きな期待がかかります。青年達には自らの頭で考え、行動する力が求められますが、日頃の生活に忙しく環境問題に思いをはせる時間も無いのではないのでしょうか。青年達の体験不足は、環境問題への行動力を養えない原因であると考えます。

本稿では私共が取り組んできた合宿型ボランティア活動に関する英国と日本の事例を通じ、青年の行動と自立を促す効果や今後の課題についてご紹介します。

2 合宿型ボランティア活動とは？

「合宿型ボランティア活動」とは何でしょうか。最初にワークキャンプという視点からご紹介します。2006 年 10 月、静岡県御殿場にある国立中央青少年交流の家で行われた「2006 第 1 回全国ワークキャンプフォーラム」において、「ワークキャンプとは合宿型ボランティア活動である。」という議論が行われました。ワークキャンプは、あるボランティア派遣団体が地域の団体（カウンターパート）と事業を立案、

ボランティアチームを派遣し、現地で宿泊しながら行う活動です。もともと、1920 年頃にフランスとドイツの若者が第一次世界大戦を誘引した相互不理解への反省と、戦争で荒廃した国土の復興をきっかけに始めたと言われています。その目的を下記に引用します[注 1]。

『世界の若者と地域の住民が、特定の政治・宗教・企業に偏ることなく、

① ボランティア・パワーで、環境や福祉を改善する。

② 友情・理解・連帯感を自然に育む

ことによって、平和・公正・緑豊かな地球社会を目指します。』

合宿型ボランティア活動とは、地域を越えた相互理解による環境と福祉の改善を目指すことと言えます。それでは、この活動は、どのように人々の行動力を育むのかについて考えてゆきたいと思います。

3 国際ワークの胎動とその問題意識

私達は、1997 年から毎年、福岡県八女郡黒木町で「国際里山・田園保全ワーキングホリデー（以下、国際ワークという）」を実施してきました。国際ワークとは、崩壊した棚田の石積みをしたり、管理の行き届かないスギ・ヒノキ林の間伐等を行う合宿型ボランティア活動の事をいいます。2007 年で第 10 回を迎えます。この活動は重松敏則氏（現九州大学大学院芸術工学

研究院教授)の発案ではじまり、その背景について重松氏は以下のように述べています[注2]。

『里山の雑木林を背景に、棚田が優美な曲線を描く風景。日本人なら誰でも思い浮かべる故郷の「原風景」だと言われてきましたが、現在ではそうではありません。過去50年間ほどの間に、農山村から都市への人口移動により、今や多くの国民が都市で生まれ、都市で育っているからです。(中略)里山や棚田の風景をイメージできないことは、そのような問題に無知・無関心であったり、傍観者になりがちだからです。また、たとえ里山や棚田の風景をイメージできたとしても、それを単に「自然」ととらえてしまうことでしょう。(中略)

しかし、国土保全や食糧危機に対する安全保障、水資源の保全、木材やバイオマス資源の国内自給による地球温暖化防止、それに四季の景観や多様な動植物との触れ合い体験の重要性、また、日本の伝統文化の継承などを考慮すると、里山や棚田は全ての人々の生活と密接に関わっているものであり、文化や地球環境とも関わりをもっているのです。

このような時代にあって、この国際里山・田園保全ワーキングホリデーは、里山や棚田での保全作業を合宿方式で体験してもらうことによって、その重要性や魅力、楽しさを認識してもらおうというものです。しかも、地元の人々と都市からの参加者のみならず、海外からの参加者も一緒に活動・交流することで、親密な信頼感や連帯の輪を広げることも意図しています。まさに、地域活動を通して、地球規模の視野や理解を広げようというものです。(以下略)』

重松氏の視点は、日本における里山の問題解決の切り札として、都市住民による環境保全活動に着目したことでした。それは、1990年に英国でBTCV(British Trust for Conservation Volunteers:英国環境保全ボランティアトラスト)[注3]の活動に参加したことにはじまります。英国では文化景観の保全の取り組みが行われており、特に野生生物と景観の保全に力を入れていました。BTCVはまずプロとしての環境保全活動リーダーを育成します。そして、一般市民にNatural Break(自然で小休憩)、Working Holiday(働く休暇)という呼びかけを行い、参加者と共に田園地域の石垣修復や雑木林管理などの環境保全活動を実施している団体です。

このBTCVの取り組みの中に、連帯感、安心感、やりがい等の「合宿型ボランティア活動の効用」を見出し、日本への導入を考えたそうです。BTCVのような環境保全事業を実施するNPO団体の設立、プロとして活動をリードするリーダーの育成、そして、合宿型ボランティア活動を展開するシステムがあれば、都会の人も楽しく里山・田園の保全活動に参加できるという着想です。

4 里山・田園保全ワーキングホリデーの活動

(1) 国際ワークの概要と目的

合宿期間は概ね8~10日間であり、実施主体は都市・農村交流を行っている山村塾[注4]、黒木有機農業の会、黒木町林業振興会、そして、九州芸術工科大学環境設計学科重松研究室(現九州大学芸術工学研究院環境計画部門)による実行委員会形式です。10年間継続できた大きな要因は、受入れ団体である山村塾と団体の代表である椿原寿之・まり子夫妻の運営する農林業

体験交流施設「四季菜館」の存在があります。椿原夫妻は有機肥料で合鴨米、野菜、お茶などを生産する専業農家です。中山間地の農業を営むには消費者の理解と支援がなければ継続できないということで、この宿泊できる四季菜館を建てられました（写真1）。

国際ワークは下記に示す5つの目的を掲げて実施しています。

- ① 地域の活動と、農山村環境を知ろう。
- ② 実体験を通じ、里山・田園の自然風景の良さや成り立ちを知ろう。
- ③ BTCVなどの海外NGOの協力により、持続的環境保全活動を身に付けよう。
- ④ 体験を通じ、ボランティアとしての素養を身に付けよう。
- ⑤ 旬の食材で作った本物の郷土料理を味わおう。

その特徴は BTCV を初めとする参加者相互からの「学び」を得ること。そして、保全活動を通じて農山村環境の良さを体感することです。

（2）山林の管理作業

八女茶で有名な八女郡黒木町は、その67%を山林が占める中山間地域であり、多くをスギ・ヒノキ人工林が占めています。しかしながら、木材価格の低迷と度重なる台風の被害を受け、



写真1 四季菜館

少しずつ農林家が地域を離れつつあります。国際ワークは地元の林研グループと協力して間伐、枝打ち、遊歩道づくりを実施してきました（写真2）。10日間の作業で実施できる面積はわずかなものです。しかしながら、写真に示すように、参加者はリーダーと共に野山に入り、「安全」に「楽しく」作業を行います。作業中は心地よい風を感じ、参加者同士の会話を楽しみ、作業後の汗も気持ちよく感じられます。明



間伐作業前



間伐作業後



完成した階段工

写真2 山林の管理作業（間伐、遊歩道整備）

るくなった林内や、手作り感たっぷりの自然遊歩道は充実感・達成感を感じるに十分であり、これまでの観光とは一味違った農山村との一体感を得ることができます。

(3) 棚田の石垣修復

この地域は隣接する星野村とあわせ、全国でも有数の棚田地帯です。美しい棚田の風景は、先祖が山を切り開いて1つ1つの石積みを行い、毎年、稲を植え、管理してきた日本を代表する文化・自然遺産です。

石積みは積み方の甘いところや、農業機械の重さに耐えられないところ、また、モグラや水が浸入したところ等から崩れが生じます。かつては農閑期に地域で助け合いながら修復を行っ



石積み修復風景



修復した棚田の全景

写真3 棚田の石垣修復

てきました。しかしながら、過疎化と後継者不足で人手が足りず、家族だけでの修復作業は大変な重労働です。そこで、国際ワークは地元の石積み技術を持つ高齢な農家の方に指導を願い、ボランティア活動で石積み修復を行っています（写真3）。

お米は米屋かスーパーでしか購入したことのない参加者にとって、農林家との石積み作業は、農家とお米、そして環境のことを考えるととても良い機会となります。石積みの高度な技術、その石の重さ、そして、小石1つ1つを手で拾い集める作業。いずれも根気のいる仕事です。このような体験活動が、棚田の大切さを心に刻む事になります。

(4) 合宿生活と地域交流

BTCV のモットーは、「People working for a better environment（人々の保全活動による、より良い環境づくり）」です。人の意識を育み、人を通じて環境を保全する。国際ワークの主テーマは、「人」にあります。合宿生活では保全作業と異なる人と物の新たな発見、驚き、そして楽しみがあり、そのワンシーンを写真4に例示します。保全作業中の休憩は作業の進捗や問題点を振り返る大切な時間です。この時間に農林家から農林業の話を聞いたり、お互いの疲れを労います。食事当番の日は有機野菜の収穫から料理まで、ここ四季菜館の農と食の繋がりを体験することができます。さらに、地元小学校の総合学習の時間を兼ねて相互交流を行います。海外参加者は子供たちに英語を教え、子供達は伝統芸能である人形浄瑠璃を披露します。また、単なる地域交流に終わらせないために、小学生と一緒に保全作業を行う時間を設けてい

ます。近い将来、子供達が農林業やボランティア活動の担い手になることを皆で期待しています。

5 国際ワークの成果と課題

(1) BTCV のリーダーとボランティア

この国際ワークには、BTCV から1名の国際リーダーと5名前後の英国人のボランティアが参加しています。BTCV のリーダーは日頃仕事をしており、中学校の先生、ナショナル・トラスト等の NPO 職員、アーティスト、そして、BTCV の専従職員もいます。彼らは、トレーニングを長年に渡り受講し、リーダー育成責任者からリーダーとして認められた資格者です。合宿型ボランティア活動への参加要請を受けて都合がつく時は、仕事の休暇を取得しリーダーとして参加します。一方ボランティアは、毎年郵

送されてくるリーフレットやインターネットで興味のあるプロジェクトを見つけ申込みます。英国内だけで、年間約 300 箇所で合宿型ボランティア活動が行われています。

(2) 国際ワークの運営と参加数

日本の活動では、トレーニングを積んだプロの日本人リーダーがいません。そのため、図1に示すように、リーダーの役割を分担してきました。主な役割として、山林・棚田の指導者は地元が担い、生活支援、グループ支援等は地元に加え大学や経験のある参加者も分担します。

次に、参加側と運営側のボランティア数、そしてリピーター数の9年間の推移を図2に示します。海外参加者を除いた数字ですが、参加側と運営側のボランティア数の規模は、合わせて45～85名にもなります。期間が約10日間と日本人にとっては長いため、参加ボランティアは数日で、スタッフも小まめに入れ替わります。福岡の国際ワークは参加者数が多い上に、プロのリーダーがいないため、スタッフ数も同程度



写真4 合宿生活と地域交流

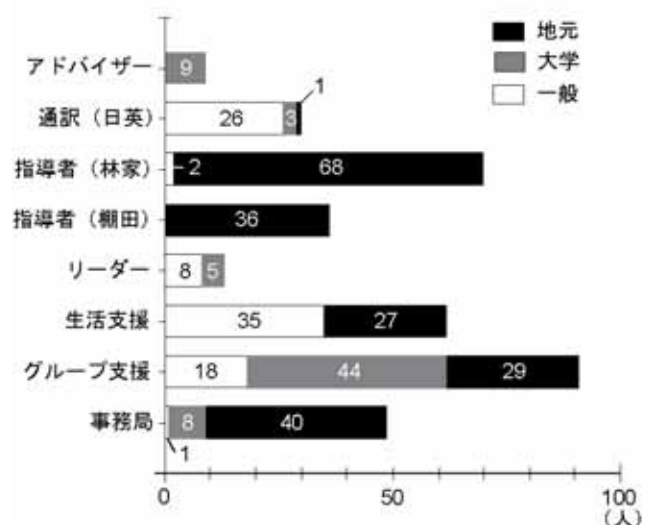


図1 スタッフの職務、属性別の延べ人数

(1997年～2005年の総数) [注5]

に多くなる傾向がありました。

図2で明らかなプラスの効果として、リピーター数は参加・運営ボランティアと共に年々増加しており、活動の継続が参加者の行動力に結びついています。しかしながら、図1、図2から指摘できる課題として、リーダー役務をこれだけ分担しながら実施してきましたが、グループ管理、食事の支度、宿泊設備の面からこれ以上に参加人数を増やすのは限界と言えます。また、これだけ大規模なイベントを過疎化の進む各地の農山村へ展開することもできません。合宿型ボランティア活動の意義を効果的に意識付けできる活動として展開するには、BTCVのようにプロのリーダーを育成し、10～15名のボランティアチームで活動すること、また長期休暇の取れない日本の現状にあわせて、1泊や2泊の活動を行うことも必要です。

(3) 「安全」で「楽しい」リーダーシップ

合宿型ボランティア活動の成功の是非は、リーダーが「安全」で「楽しい」活動を展開でき

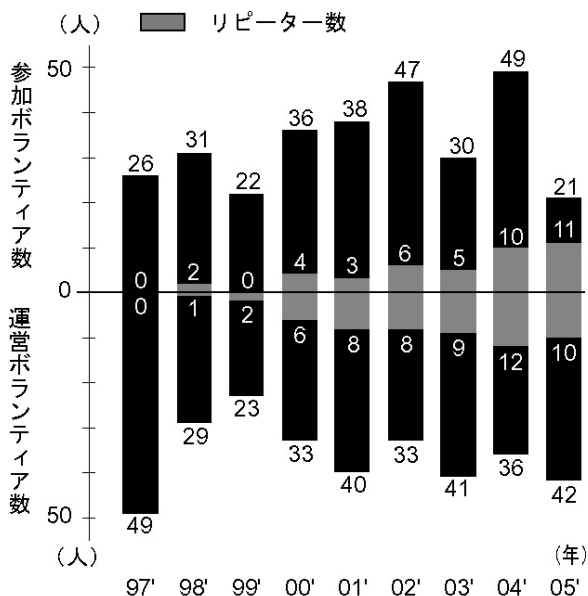


図2 参加・運営ボランティア数の推移

[注5]

るかどうかによります。

BTCVの国際リーダーと日本の運営ボランティアは、毎年のように現場の安全管理について議論を行いました。当初、私達が良く知らなかった事ですが、BTCVリーダーは現場でリスクアセスメントと対策を行う義務が課せられており、それを実施しなければ事故時の保険が適応されないということでした。一方、私たちは、日頃の活動の延長で、説明不足のまま作業を進める事もありました。その度にBTCVリーダーは通訳を介して作業を中止させ、仕事の内容、道具の使い方、安全への配慮について逐一確認を行い参加者への説明を行うのでした。作業の事前事後には、かならず体操やストレッチを行い、休憩時間は努めて楽しい場作りを行います。

私達は、BTCVのリーダーと共に作業を重ねる中で、「BTCVのリーダーは、よくトレーニングを積んでいる。」という事に気が付きました。一方、日本の指導者（地元農林家やリーダー等）は、優れた作業技術や多くの知識を有しています。しかしながら、参加者（初めて体験する参加者を含む）と共に保全活動を効果的に進めるマネジメント技術については、ほとんどトレーニングを積んでいませんでした。今後、安全で楽しい活動をプロデュースできるリーダー育成が求められています。

次に、国際ワークの活動効果は、図2のリピーター数だけでなく、図3の事後アンケートにも示されています。合宿ボランティア活動を終えて感じたことは、「未知の人々と連帯する喜びを体感できた。」が最も多い傾向にあります。人々と連帯する喜び。これがBTCVリーダーの実践する「安全」で「楽しい」ボランティア活

動の成果であり、意識付けされた人々が継続的に環境保全活動を行う原動力となります。

(4) リーダー育成を通じた青年の自立

10年間に渡る福岡での国際ワークの成果は、約10日間の合宿型ボランティア活動により、多くの保全活動を実施できること、また、人々との連帯を感じることができました。一方、今後の課題は、日本国内におけるプロのリーダー育成が第一であります。それは、リピーターとして活動を継続しているボランティアが、更なる技能を身に付けリーダーとして自立することに繋がるからです。また、技能あるリーダーが活動を引率すれば、運営スタッフ数は少なく済み、少人数のグループ活動を各地で展開することが可能となります。リーダーの「安全」で「楽しい」活動は、各地にリピーターを増やすに違いありません。このような展開は、多くの青年達の参加を促し、自立の機会を与える事になると期待されます。

6 合宿型ボランティア活動の展望

(1) 国際ワークと BTCV

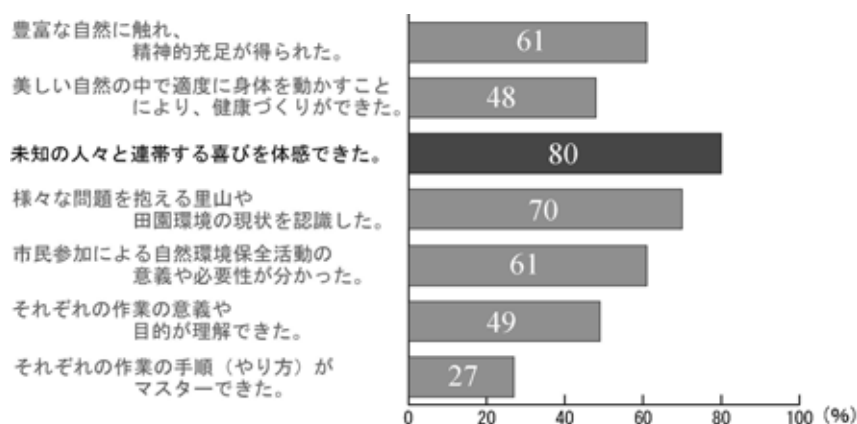


図3 保全合宿を通じて感じたこと（複数回答）

1997～2002年の国内ボランティア123人

BTCVの国際部は、これまで各国に複数のチームを派遣していましたが、近年、参加者が集まらないために事業のキャンセル率が急増してきました。英国における合宿型ボランティア活動の過当競争、もしくは、ボランティア市場の飽和状況とも考えられますが、彼らが最も重要視している点は、質の悪い活動が増加している影響です。BTCVは、主に次の3つの対策を講じています。

- ①リーダーはBTCVの看板であるため、リーダーのトレーニングを強化すること。
- ②2006年度から海外への派遣チーム数を各国1団体のみとし、本当に必要とされる地域に派遣を行うこと。
- ③派遣を取りやめたカウンターパートに対しては、CVA(Conservation Volunteer Alliance：国際環境保全ボランティア同盟)の実施する環境保全ボランティア活動認定プログラムへの参加を促すこと。

福岡の国際ワークは、これまでの実績を踏まえ、国際リーダーとボランティアの派遣は行わないこととされ、代わりに認定プログラムへの

参加を提案されました。BTCVは活動マネジメントの基準化を行うことにより、ネットワーク団体の自立支援を行おうとしています。私達は、これまでの協働関係を継続発展させ、直面している国際ワークの課題に対応するために、リーダー育成活動の展開とCVAへの参画を目指します。

(2) コーディネイト力の強化

日本において合宿型ボランティア活動の展開を図るには、図4に示した4者の力が協働されなければならないと考えます。

まず地域は、慣習上、外部の人々に対し閉鎖性が高いのが一般的です。その影響からか、地域外の人々によるボランティア活動に対し傍観的な事例が少なくありません。外部の人たちと協働する市民力が必要に思われます。

NGOは、これまで仲間内だけのグループ活動や、単なる日帰り体験活動が多かったため、地域との信頼関係や長期に渡る交流関係が築けない事例が少なくないに思われます。本来の使命を果たすには、プロとしての能力を開発し、継続的に地域、行政を支援する力を発揮しなければなりません。

企業は、経済に内部化されない各種問題に対し、協力する社会的責任があります。合宿型ボランティア活動に対する支援は人材育成に直結するため企業メリットも多く、資金支援の検討

が求められます。

最後に行政は、これまで箱モノ行政に象徴される開発・成長のハード政策を優占してきました。しかしながら、ハードを支えるソフトがなければ成り立たない時代です。今後は地域の資源保全と人材育成政策を最優先にすべきです。

今後、地球環境問題等に対し、青年達が力を発揮してゆくには、この4者が連携して人材と資金を集約しなければなりません。協働事業として合宿型ボランティア活動を各地に展開し、青年達の活躍の場を作りましょう。

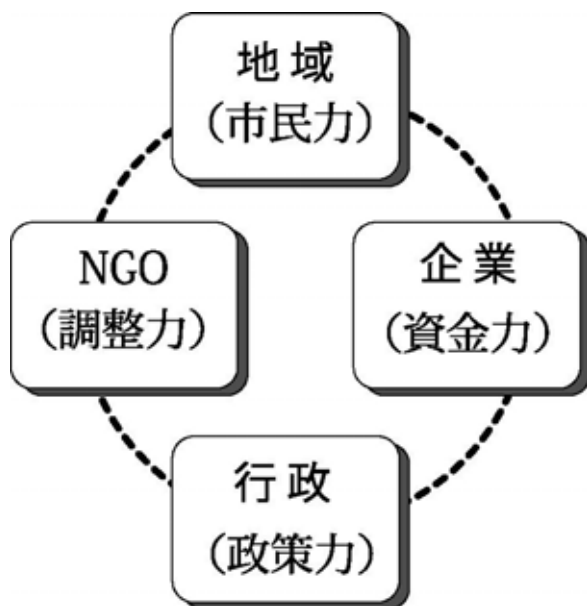


図4 合宿型ボランティア活動の強化に必要な
4者の協働

[1] WORKCAMP IN THE WORLD 2006, NICE
日本国際ワークキャンプセンター, p8.

[2] 国際里山・田園保全ワーキングホリデー実行委員会(2006):第9回国際里山・田園保全ワーキングホリデーin 福岡報告書.

[3]BTCV はカントリーサイドの環境保全を実践的に行う英国を代表する NGO 団体です。詳細な情報はこちら.

<http://www.btcv.org/>

[4] 山村塾の詳細な情報はこちら.

<http://www.h3.dion.ne.jp/~sannsonn>

[5] Kazuo Asahiro, Toshinori Shigematsu (2006): International Conservation Working Holidays in Fukuoka, Japan and Strategy of BTCV in United Kingdom. Journal of Landscape Architecture in Asia Volume 2, Japanese Institute of Landscape Architecture, p109-114.